

ガンで逝った美樹ちゃんと母との愛の記録

ママともう一度呼んで

菅原有一著



ママともう一度呼んで

菅原有一著



秋元書房

■著者紹介

菅 原 有 一

(すがわらゆういち)

北海道小樽市生れ

諸雑誌に小説を発表

主なる著書

「太陽の子」「牧口先生」「続牧口先生」「SF その学園をマークしろ」

「SF 甲子園の怪腕投手」

多門正人シリーズ

①「女王陛下のラブレター」

②「ビーナスの首」

③「大統領の機密文書」

以上秋元書房刊

現住所

埼玉県上尾市小敷谷 77-1 西上尾第二団地 3-27-201

■佐藤玲子さんの住所

埼玉県上尾市小泉 405-10

ママともう一度呼んで

著 者 菅 原 有 一

発 行 者 秋 元 英 子

発 行 所 株式 秋元書房
会社

東京都新宿区赤城下町42番地

電話・東京(268)0758代表

振替 東京 27047

・定価はカバーに表示してあります。乱丁・落丁本はお取替えいたします。

組版・印刷 暁印刷・製本 清文堂

© Yūichi Sugawara 1980

0093-1003-0029

目次

第一章	少女のかげり	5
第二章	千羽鶴	18
第三章	泣いてはいけない	31
第四章	もんしろ蝶	51
第五章	指折りかぞえた退院	70
第六章	誕生日	115
第七章	クリスマス・パーティー	131
第八章	友情	147
第九章	大きなとんぼ	180
第十章	母の願い	202
第十一章	ママともう一度呼んで	228
あとがき		253

(文中の絵、習字等は生前、美樹ちゃんが書いたものです)

小児の横紋筋肉腫というがんは、通常、骨格の深部に発生するため、極めて発見がむずかしく、それと分かったときには、病気は治しにくい段階にまで進んでいることが多い。そして転移しやすい場所としては、リンパ節、肺、骨、骨髄などがあげられる。

本書でとり上げた佐藤美樹ちゃんは、九歳のときに脚が痛みだして歩行できなくなり、手術をしたときには、すでに骨盤内に大きな腫瘍ができていて、全部を摘出することは困難な状態にあった。そして最新の抗がん剤や放射線治療のいかにもなく、一年後に死亡したのだった。

わが国の子供のがんは、毎年罹患する者が二千人から三千人いるといわれる。それは毎年子供が事故で死亡するのと、ほぼ同率である。大人のそれも含めて、一日も早くがんの撲滅される日の近いことを切望せずにいられないが、さし当ってはがんの知識が普及されて、各自ががんに関心を持つようになり、定期的に全身の精密検査を受けて、健康の状況を診断してもらおうようになることを期待したい。そうすることによって早期発見が可能になり、手遅れにならぬように努めることは、子供のためにも、両親自身のためにも大切な心がけと思われる。

第二第三の美樹ちゃんを出し、その母の深い嘆きをくり返さぬために――。

ママともう一度呼んで

この本を幼くして逝った

美樹ちゃんに捧げます

第一章 少女のかげり

人の運命は、暗やみのなかを手さぐりしながら、歩いて行くようなものだといわれている。つまり一歩ふみだした先には、何が待ち受けているかわからぬというのが、われわれの人生というものなのであらう。

佐藤玲子にとっても、まさしくそのとおりであった。彼女は人並みに幸せな家庭の主婦であった。夫の英世はサラリーマン、長女の美樹は小学四年生、長男の英樹は同じく一年生、そして姑のハナの五人家族で、働きの彼女は、居住地の埼玉県上尾市にある銚旭計器製作所に、六年前から勤めていた。

玲子は三十五歳だった。小柄だが、負けん気が強く、職場にあってもよく働いた。

旭計器は新潟県長岡市にある日本精機株式会社の傍系会社で、富士重工、本田技研、ヤマハ、鈴木などの自動車やオートバイのスピードメーターの組み立てをおこなっている。従業員は二百

名、その四分の三が女子従業員であった。会社の組織は総務、技術、品質保償、製造の各部に分かれていて、佐藤玲子は製造部で組み立ての仕事をしていた。

ベルトコンベヤーの流れ作業なので、うつかり何か考えごとをしていたり、わき見をしたりしている、仕事にミスをおかしてしまふ。どんなに熟練していても、慎重な注意力が必要だった。それだけにはたで見るほど楽ではなく、かなり気疲れのする作業だったのである。

しかし、がんばり屋の玲子は、なまけることなく熱心に働いた。元来、彼女は、ものごと打ちこむことが好きだったのである。――裏を返せば、あれもこれもと、何事につけても気迷いするような生きかたが、きらいだったのだ。つまり性に合わなかったのである。

もつとも、玲子が仕事に打ちこめたのも、二人の子供を姑がよく面倒をみていてくれるので、家庭に対してなんのわずらいもなかったせいもある。

姑のハナは昔かたぎで頑固なところもあったが、話のわからぬ人ではなかった。何かにつけて嫁を立てるようにしたし、玲子のほうでもまた、姑を立てるようにした。そして玲子は、会社の休みに買いものに行くときなど、よく姑を誘って一緒に出かけた。なにも知らぬ近所の人たちは、ハナと玲子をはんとうの母娘と思っていたくらいである。ハナはまた、玲子が共働きをしているのを多とし、家事を引き受け、孫たちをかわいがって面倒をみていたのだった。

佐藤家は、このように平安で、人並みの幸せのなかにあった。そして玲子は、俗に上を見れば

きりが無いというように、高望みをすることもなく、自分たちの生活に満足していたわけではなかったが、さりとて不満を抱いているわけでもなかった。

そのおだやかな生活に、嵐の前ぶれのように暗影が投じたのは、昭和五十三年の真夏の暑いさかりであった。

明日が小学校の一学期の修業式という、七月二十日——ハナが家のまわりを掃除していると、電話が鳴った。ハナがいそいで家に入り、受話器をとると、下校途中の美樹の泣き声が聞こえてきたのだった。

「おばあちゃん、足が痛くて歩けないの。迎えにきてー！」

「いま、どこなんだい？」

「大公園のそば」

「じゃ、すぐ行くから、待ってるんだよ」

ハナは掃除をそのままにして、家をとびだして行っった。どこの家でも祖父母にとって、孫はかわいいものである。が、ハナには孫むすめが特別にかわいかった。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

といって、学校から帰ると、片時もそばを離れず、母よりも父よりも祖母がいいのであった。大公園までは、ハナの足で十五分ほどかかった。ハナは心配だった。通学の途中で、よくころ

んで膝小僧をすりむいたりする美樹だったが、歩けないほどに足が痛いと言ったことは、今までになかったからである。

ハナが大公園のところまで行くと、道端の草地にカバンを背負ったまま、美樹がべたんと尻をつき、脚を投げだして、目を泣きはらしていた。

「そんなに痛むのかい、美樹？」

ハナは近づきながら、声をかけた。

「うん、とても痛いよ」

「さあ、しっかりつかまるんだよ」

ハナは背なかを向けてしゃがみ、孫むすめを背負った。

「どっこいしょ」

そう言いながらハナは起き上がり、美樹を家に連れて帰ると、カバンを上がり口に置かせ、美樹をおぶったままその足でA病院へ連れて行った。

美樹は小学二年のときに、リューマチにかかったことがあったので、ハナは、そのことを医師に言って、よく診察してもらったが、別に心配するほどのことはないといわれ、ほっと胸をなでおろしながら、鎮痛剤をもらって、再び美樹を背負って帰ったのだった。

しかし、あくる日の学校の修業式には、まだ歩くと痛みがひどく、美樹は欠席した。代わりに

ハナが学校へ行き、四年三組担任の佐藤えみ先生に事情を話し、通知表や、図工や漢字のテストなどの作品をもらって帰ってきた。

夏休みにはいり、じりじりと焼けつくような日照りがつづいたが、美樹はあまりそとへ出なかった。いつもなら弟の英樹と一緒に、近くの小公園へ行き、とんだりはねたりして元氣よく遊ぶのだが、脚が痛むのを怖れてとじこもっていたのだった。

だが、そうしてとじこもって、脚をいたわるようにしていたのに、それでも膝小僧のあたりが痛みだし、美樹はその苦痛を祖母や、勤めから帰った母に訴えるようになった。

「じゃ、あした病院へ行つて、診てもらおうね」

玲子はそう言いながら、ちょっと不安になってきた。別に心配するほどのことはない、医師は姑に言ったというので、彼女は安心してゐたのだが、たびたび痛みだすのを見てみると、ほかに病気があって、それが原因で痛むのではないか、と思われてくるのだった。

そういえば二か月ばかり前のことだが、

「ママ、最近、膝小僧が痛い」

と美樹が言ったことがあった。

「遊びすぎじゃないの」

「ううん、そうじゃない。きのうは書道塾へ行つて、帰ってきてからおさらいしたんだから、ぜ

んぜん遊ばなかったんだよ。だけど、きょう体育の時間に、うまく飛び箱がとべなかったんだもん。膝が痛くて痛くて……飛び箱の前でしゃがんでしまったの。……でも痛いのは、すぐなおっちゃうの。変だよ」

玲子は、そのときの美樹の言葉を、ふと思いだしたのだった。そして脚の痛みは今にはじまつたことではなく、かなり以前からのもので、その痛みの根がずっと深いものであるように思われてきた。しかし彼女は、すぐにそれをうち消した。

（そんなことがあるはずはない。病院の先生が言ったように、たいしたことはないんだわ。そうよ、脚の筋がねじれたか、それともリューマチがまた起きたのかもしれないし——）

あくる日玲子は、会社のほうは休暇をとって、美樹をA病院へ連れて行った。そして、美樹がたびたび痛みを訴えることを話すと、病院では外科や整形外科の医師たちが診察し、「ふつうの筋肉痛です。子供の成長期にはよくあることで、心配はいりません」と樂觀的な見立てをのべた。

ところが、レントゲン検査で、恥骨の左右の太さが違っていることがわかったのだった。痛みを感じる左側の骨のほうが、はるかに太くなっていたのである。医師は首をかしげたが、「しばらく様子をみることにしましょう」

と言って、鎮痛剤をくれた。

「先生、このまま大人になっても、障害はないのでしょうか？」

と玲子はたずねた。

「ないと思いますよ」

医師はそぐさに答えた。

玲子は、その医師の言葉に安心して、

「美樹ちゃん、だいじょうぶよ。たいしたことないって、先生がおっしゃったから。だんだんと痛みがとれて、そのうちにけろっとなおるわよ」

けろっという言葉を、おどけた調子で言うと、美樹がけらけらと笑った。

むすめの笑顔を見ると、自分で口にした言葉ではあったが、ほんとうにけろっと治るような気がしてきて、玲子も笑った。

鎮痛剤が効いたらしく、美樹の痛みもおさまった。

(やはりお医者さまの言うとおりだった)

と玲子は安堵したが、英世もハナも同じようにやれやれといった面もちで、机に向かって絵を描いている美樹をながめるのだった。

美樹は、劇画を見ておぼえた少女の絵を、クラスメートたちが羨むほど上手に描いた。なかに

は少女の絵をどんなふうに描いたらいいか、美樹から教えてもらっている生徒もいたくらいである。習字もまた得意で、文化書道学院展に出品し、銀賞と三等賞に入選していた。

「ママ……おばあちゃん……足が痛いよー」

ある夜、寝入っていた玲子は、美樹のさけび声に目をさました。びっくりしてとび起きると、美樹がベッドの上で目をひきつらせ、ころげまわっているのだった。

英世も、ハナも起きてきた。

「どうした、美樹？」

「おばあちゃんだよ、美樹」

父と祖母も、うろたえながら声をかけた。

「足がちぎれるよ！ 死ぬほど痛い……ああ、ああ……」

美樹は苦しうにさげぶ。

そのあいだに玲子は、台所へとんで行ってコップに水を汲んできた。そして美樹を抱きよせると、鎮痛剤をのませた。

（夕食後に夜の分の薬をのませたのに、効かなかったのかしら——）

ちらと頭の中にその考えをかすめさせながら、

「おちつくのよ、美樹。足をばたばたさせたら、かえって痛くなるばかりよ」

と玲子は言つて、痛がる膝のあたりをさすつてやった。一時間ばかり懸命にさすつたのだが、鎮痛剤の効果はまったくなく、美樹は目をむいて泣きわめきながら、痛みを訴えつづけた。

「お父さん、病院へ電話してちょうだい」

玲子はいたたまらぬ氣持で、夫に言つた。

「このままでは美樹、死んでしまつてよ。あすこは救急病院だから、夜なかでも診察してくれるはずよ」

「よし」

英世は受話器をとつた。

ところが、A病院では、明朝まで待つてほしいといつて断つたのである。英世は、世間にたいしては無口でおとなしい男だったが、このときばかりは人が変わったように激怒して、

「待つていられないから、たのんでいるんじゃないか」

と、けんかごしにねばつたすえに、ようやく先方に承知させ、夫婦で美樹をA病院へ連れて行つたのだつた。

だが、さいわいなことに病院へ着いたところに、美樹の脚の痛みはうすらいできて、その夜は湿布をしてもらつただけで、家に帰つた。

次の日、美樹はすっかり元氣になつていたが、あれほどにはげしく痛むのだから、何かほかに

原因があるのにちがいない——家族一同はそう考えて、ハナが美樹をA病院へ連れて行き、勤めの帰りに玲子が立ち寄って、病院の待合室で一緒になった。

そして玲子は、もう一度くわしく診察してくれるように、医師にたのんだ。

すると医師は、

「これまでも再三診察しているのだし、わたしとしては、なんともないと思うけれど、念のためがんセンターへ行ってみて下さい。紹介状を書きますから」

と言って、しばらく待たせてから、紹介状とレントゲン写真を玲子に渡した。

それは美樹が下校の途中で脚が痛くなり、ハナが背負ってA病院へ行き、そして手当を受けてから、ちょうどまる一か月たった——。

「がんセンターへ行ってみて下さい」と言うA病院の医師の言葉に、玲子は少なからぬ衝撃を受けた。

（まさか、そんなことが！）

彼女は心のうちで何度もつぶやいた。

（そんなばかなことがあるわけではない。あつてたまるものか！）

玲子はその日（八月二十三日）会社を休み、美樹と姑の三人で埼玉県立がんセンターへ出かけ